

## 庄垣内正弘著『ウイグル文アビダルマ論書の文献学的研究』

吉 田 豊

## 1 本書と本書で扱われる資料について

本書は、大英図書館が Or. 8212/75A の番号のもとに保管する、A. Stein の将来にかかる敦煌出土ウイグル語仏教文献のテキスト、翻訳、注釈、語彙集である。この本体に先行して、長い解説と本論で扱われたテキストと内容的に関連する二つの文献についての研究が添えられ、全体は参考文献表で締めくくられる。このウイグル語文献は、安慧 (Shramati) による『阿毘達磨俱舍論実義疏』(Abhidharmakośaśāstryaṭīkātyārtha; 以下『実義疏』と略す) の漢訳本の第一巻をウイグル語に訳したものである。ただし漢訳本は完存しておらず、わずかに第三巻の大部分を含む写本と、第一巻から第五巻を極端に抄出した写本が敦煌の藏経洞から発見されている。前者は現在北京の国家図書館に架蔵され (L3736+北新140)、後者はパリの Bibliothèque Nationale が所蔵する (P. ch. 3196)。前者は一九九五年に、後者は『大正大藏経』に録文が発表されており、利用は容易である。

安慧は六世紀の人で、『実義疏』は世親(五世紀)の『阿毘達磨俱舍論』の注釈書の一つであるが、『俱舍論』に反駁を加えた衆賢の『阿毘達磨順正理論』を批判しており、仏教学の見地からは非常に重要な位置を占めるといえる。しかしながら、漢訳本は部分的にしか伝存しないことと、全訳が存在するチベット語訳がようやく一五世紀から一六世

紀初頭の時期に成立し、しかも基づいた梵本が劣悪な写本であったことにより、文意をとりにくい箇所が散見し解釈は困難を極めるといふ状況から、漢訳からの重訳とはいえずウイグル語訳の価値はきわめて高いとされる。Or. 8212/75Aとともに発見されたウイグル語写本 Or. 8212/75B は、『実義疏』の第四巻の大部分の翻訳である。どちらも非常によく似た体裁の冊子本である。なお75Aは『実義疏』の第一巻を二つの巻に分けて訳しており、75Bでは途中の八四四行目で第七巻が始まると記されている。ウイグル語訳では漢文の一卷を各二巻に分割していたことが知られる〔羽田博士史学論文集〕下巻、京都、1958、p. 192参照。著者のやや異なる見解は本書一頁に見られる。なおラサで見つかった梵本については近年大谷大学で輪読会が行われていると聞く。早い時期に成果が発表されることを期待する。

二つのウイグル語写本は一一世紀初めに封蔵された敦煌の藏経洞（現在の第一七窟）で見つかっているが、実際には藏経洞の発見者である王道士がそより北にある元朝期の洞窟で入手した文書で、二次的に藏経洞に持ち込まれたことが羽田亨によって指摘されている。羽田はこれらの写本を最初に研究し概要を明らかにしたが、その際、同じく元朝期の窟で発見されたと考えられる Or. 8212/109 が至正一〇（一三五〇）年に書かれたという奥書があることから、これらの二写本も同じ頃のものであると推定している。本書の著者の庄垣内も、Or. 8212/75Aの冒頭の書き込みに見える龍の年は、一三五〇年に近い辰年であろうとしている。

ウイグル語のアビダルマ文献を研究していた百済康義の一連の研究で明らかにされているとおり、元朝期ウイグル仏僧たちの教学研究熱は高く、多くのアビダルマ文献、阿含文献の翻訳がある（『仏教学研究』38, 1982, pp. 23-4）。それらどれも漢文仏典を直訳体で翻訳し、漢文原典の漢字を随所に引用して、原典との対照を容易にする配慮がなされている。彼らはむしろ梵語の研究にも励んだのであり、梵文の阿含經典の版本はこの時代のその同じムーブメントの所産であったろう（山田龍城『梵語仏典の諸文献』1959, pp. 33-35; H. Nakatani, *Bulletin d'Études Indiennes*, No. 4, 1986, pp.

305-19)。75Aと75Bは当時のウイグル人による教学研究の息吹を伝える最大の文献である。それにしても『実義疏』の漢文原典は、なぜ入蔵されなかったのか。桜部は玄奘が翻訳したが未完に終わった可能性も指摘する（『中外日報』1991. 9. 5）。一方百濟は、敦煌出土の漢訳仏典に中原未伝のものが見つかることをあげて、『実義疏』も西域で翻訳され中原に伝わらなかった可能性を指摘する（『印度学仏教学研究』29/1, 1980, p. 76）。いずれにしても、蔵経洞で見つかった漢文写本は唐末頃の写本であるというから、漢訳はその頃までに成立しており、その後元朝期までは伝存していたのである。アビダルマ関連の文献のウイグル語訳には、漢訳からの重訳であることは明らかなのに、現在我々が見ることができるといえる一切経類に入蔵していないものが他にも存在することは注目される。庄垣内が本書の第二章で扱っている、二種類のアビダルマ関連の文献はそのような例である。

以上、本書で扱われた資料の時代や仏教学における位置づけについて簡単に説明した。本書は、一九九一—一九九三年に『阿毘達磨俱舍論実義疏の研究』I—IIIとして発表された著書のIの全体とIIに収録された語彙集に大幅な改訂を加えた増訂版である。ちなみにIはOr. 8212/75Aのテキストと翻訳、IIは75Bのテキストと翻訳および75Aと75Bの語彙を含んでいた。IIIは両者の写真版である。旧著は上で述べたような仏教学上の重要性から、ウイグル語学者だけでなく仏教学者の注目を集め、評者が把握している限りでも以下のような書評や紹介が発表されている。桜部建『中外日報』（一九九一年六月二八日・同年九月五日）、福田琢『仏教学セミナー』54, 1991, pp. 92-106, 同『史学雑誌』103/6, 1994, pp. 92-101；武内紹人『史学雑誌』102/1, 1993, pp. 135-37；K. Röhrborn, *Turkic languages*, 3/2, 1999, pp. 286-89。これらの書評に於いて仏教学者たちは、とりわけ本資料のアビダルマ研究における価値を絶賛し、チベット語訳との相違について注目して詳説している。それらは増訂版である本書にもそのままあてはまるので、ここでは彼らの評価の一端を一部引用しておく。……興味深い問題の多いこの特異な言語による特殊な論典を読みやすい形で提示されるに至った著者の多年の研精に深い敬意と感謝の念を表明する。……この書の出現はさらにそれ

(「チベット語訳『実義疏』の研究…評者)に刺激を与え、アビダルマ研究全般の進展に資することを確信する。」(校部)：「以上のように『実義疏』は、その重要性が知られていながら、現存テキストの不備ゆえに十分な研究がままならず、……このような状況を考慮すれば……敦煌本ウイグル文『実義疏』の持つ資料的価値の高さは自ずと明らかである。とは言うものの、ほとんどの仏教学者にとつて、ウイグル語文献は未知の領域である。」(福田1991, p. 95)「本研究の登場によつて、仏教文献学はチベット訳『実義疏』のさらなる研究の必要を痛感することであろう。」(福田1994, p. 99) ; Shogaitos Edition ist mustergütig und wäre - beim gegenwärtigen Stand der Forschung - in Europa nicht machbar gewesen. ... Wir haben jetzt eine solide Basis für weiterführende Studien zu diesem Text, der durch seinen Index auch für das "Uigurische Wörterbuch" ausgewertet werden kann. (Röhrborn, pp. 288-9).

著者の庄垣内は、内外にその名を知られたウイグル語文献学者である。言語学の立場からウイグル語文献を解明するユニークな手法で多数の研究成果を公表しており、文字通り世界の第一人者となっていることは周知の事柄である。この分野での研究の処女作となったのは上述のOr. 8212/109に関する研究で、一九七四年に発表された。その後もOr. 8212/75Aに付属する二〇葉ほどからなる別の冊子本についての研究など、精力的にウイグル仏典、とりわけ元朝期の文献の言語学的研究をすすめている。『実義疏』の翻訳である75AとBは両者を合わせると七〇〇〇行を越え、数多いウイグル語文献のなかでも最大規模を誇る。ウイグル語の言語学的研究にとつて絶対不可欠であるとの認識のもと、庄垣内は本資料について着実な研究を重ねていた。ちなみにこの二〇葉ほどの別冊子は羽田亨が、『実義疏』に属するものと信じていたが、実際には別の仏教説話であることを、庄垣内が世界に先駆け明らかにしていたのであった。

旧著はそれまで二〇年ほどの期間の研究の集大成として発表した大作である。漢文の構文を摸した特異な語順で、稀少の語彙を交えながら、しかも極端な草書体で書かれた七〇〇〇行を超える本資料の全文の解説は、著者をおいて

はなし得ない偉業として極めて高い評価を得ていた。上に引用した Rönborn の書評の一節でも、旧著のような研究はヨーロッパでは不可能であろうと明言されている。Uigurisches Wörterbuch の著者であり、ヨーロッパの第一線でウイグル語文献研究をリードしてきた研究者の言葉である。しかし著者のためまぬ改善の努力と、この間に新たに発見された、あるいは入手可能になった資料は、著者に旧著の改訂の必要性を強く認識させた。かくして刊行後一五年を経た昨年、大幅な改訂と増広を施して成ったのが本書である。著者の不断の精進には脱帽する。B5版で七五〇頁にもなる本書にはしかし、TSBのテキストと翻訳は含まれていない。著者によればTSBの研究ははまだ改訂の必要がないという。

著者にとりわけ改訂の必要を感じさせたものは、この間に TSA と重なる部分を有する別写本（本書では甘肅本と呼ばれる）が中国で発見されたことと、『実義疏』が注釈を施している『阿毘達磨俱舍論』そのもののウイグル語訳が研究可能になったことであつたという。後者はヘディングの収集品で現在ストックホルムの民俗学博物館が所蔵している。TSA の本文には多くの訂正が認められ、旧著では訂正された文を本文とし、訂正前の文を注釈にあげていた。しかるに甘肅本のテキストはむしろ訂正前の本文と一致し、当初訂正と考えていたのは、必ずしも訂正ではないことが判明した。それ故今回は、本来の本文をテキストとして掲げその翻訳を提出することにした。そして訂正と考えていた部分を注釈で扱った。また『俱舍論』そのもののウイグル語訳の存在は、漢文原典との対照を可能にし、翻訳に使われた多くのウイグル語の単語が、どのような漢語に対応しているかが以前にも増して明らかになった。それによつて対照すべき原典が残っていない部分を翻訳する場合にも、対応する漢語を特定することができるようになり、遙かに正確な訳文を作ることができるようになったという。

## 2 本書の内容と注意すべき点など

以下では本書の内容を簡単に紹介し、評者が気づいた点を指摘しておきたい。

### 2-1 解説篇

冒頭 (pp. 1-2) で、『実義疏』も含めてウイグル語で残されているアビダルマ論書をリストし、全文を訳したものと抜粋訳の二種類があることを示している。すべて元朝期の写本で、多くの場合『実義疏』同様漢字を挿入しているという。百済はかつて同様のリスト (『仏教学研究』38, 1983, p.2) を作っているので両者を比較すると、本書のリストには『阿毘達磨俱舍論』の翻訳とされる Ch/U6580 が見えない。ロンドンには現在 S8514 の番号のもとに、75A が本来封入されていた紙袋が保管してある。漢文仏典の反故を使って作った袋で、外側に「一」磨俱舍論実義疏卷第一」とある (森安孝夫『東方学』99, 2000, p. 124 参照)。手元にメモがないので怪しいが、ウイグル語も書いてあったように思う。この情報も付け加えることができよう。小断片ではあるが、ブラーフミー文字表記のサンスクリットとウイグル語のバイリンガルの『俱舍論』も仏教学者には注目されよう、cf. D. Maue, *Altürkische Handschriften. Teil 1*, Stuttgart, 1996, pp. 71-73, Plate 42°.

続く第一章 (pp. 3-134) はウイグル語訳『実義疏』の解説で、一三〇頁余りにわたり長大である。旧著にあった短い解説を増広してあり、四つの節に分かれている。第一節 (pp. 3-50) はロンドン本の解説で、出土場所、体裁、奥書、『実義疏』のウイグル名が論じられた後、内容面の検討に入る。まずウイグル語版とチベット語 (およびそこから重訳であるモンゴル語版) との比較である。これは福田が旧著の書評に於いてすでに試みているが、ここでははるかに詳しく行われる。ウイグル語訳 (及びその直接の原典である漢訳) が、多くの点でチベット語訳より増広されている

だけでなく、内容を理解しやすくするために問答体に改められていることが指摘される。現在残された漢訳の第三巻で見ると、後者の特徴は漢文原典が既に備えていたと理解されるが、ウイグル語訳するときさらに独自にこの手法を適用していた可能性も指摘される。かつて桜部は漢訳の第三巻が発見される以前、パリの抄本の冒頭にある「惣二萬八千偈」に関して、現存するチベット訳の分量がほぼそれに対応するという見解を述べている（『三蔵』105、1975、p. 80）。漢訳がチベット訳より浩瀚であることが事実なら、漢訳の方が原典を増広していると理解すべきであろう。第三巻が発見された現在、チベット語訳と漢訳を直接照合することこそが急務である。

次にパリの抄本との比較に於いて、著者はウイグル語訳に対応する部分があることや第三巻の漢訳との対照から、抄本が確かにかつて存在した『実義疏』から抜き書きされたものであるという桜部の指摘を確認している。ここでは旧著に対する桜部の貴重な指摘が顧慮されていないことは残念である。旧著の紹介文において桜部は、抄本の作者の書き加えの可能性を指摘しつつ、抄本の75A・1529-1536に対応する箇所が、庄垣内の考えた部分と異なることを指摘していた。さらに桜部は、75Aの1039-1043に対応する部分が抄本には確認できること、しかもそれは偈頌になつてゐることを発見しているが、その情報も顧慮されていない。パリの抄本はくずした漢字で乱雑に書かれており、原文を引用する際は『大正大藏経』に収録されたテキストを写真版によりチェックする必要がある。例えば本書三三頁で引用されている原文の「嘗以語業」は「常以語業」、「困捕魚次」は「困捕魚次」と書かれている。

75Aには、特に前半部に多くの訂正が施されている。それらは、「+」記号による挿入、「-」による削除、「○」による取り替えである。この訂正の性質についても著者は詳しく論じている。著者によれば『俱舍論』からの引用部分では、原文と対照して行われているが、それを除く部分では、『順正論』や『実義疏』の原文を対照していなかったという。この部分では、J. P. Lautによるウイグル語仏典写本の校正方法に付いての論文が参考になる。cf.

*Altorientalische Forschungen* 19, 1992, pp. 133-54。庄垣内は三種類の訂正を等しく訂正と呼ぶが、Lautは75Aに添え

られた二〇葉の冊子本について調査し、「+」と「ト」は確かに校正記号だが、「○」はそうではなく言い換えなしの意味の補足だという。実際庄垣内の説明を詳しく読めば、Lautの説明が正しいことが確認できる。ひるがえって、旧著ではこの言い換え及び意味の補足部分を本文として掲げていたのであつたから、かえすがえすも今回の処置が当を得たものであることが分かる。「○」による補足・言い換えについては下記の翻訳の項も参照されたい。第一節の最後には、ウイグル語訳に未訂正のまま残った誤訳や誤写が示される。

第二節 (pp. 50-53) は中国で近年発見された『実義疏』のウイグル語訳が扱われる。まず最初に甘肅本とロンドン本の比較である。その結果、甘肅本は著者の言う「訂正」前のロンドン本とよく一致し、基本的に同じウイグル語祖本にさかのぼると考えられるが、見いだされる若干の相違から判断して一方が他方を書写したものではないという。一方、敦煌の北区石窟で新たに見つかった貝葉三点は、『実義疏』第一巻のウイグル語訳の抜粋文をつなぎ合わせた形式の写本が二点、第二巻の(抜粋ではない連続した)訳が一点である。前者はロンドン本に対応する箇所があり、抜粋のあり方や翻訳の異同が判明する。抜粋訳されているウイグル文はロンドン本に比して漢文を擬した語順や訳語の選択などで一致する部分も多いが、その実、相当に相違し、両者は独立した翻訳である。このことは、擬漢構文による翻訳方法が訳者ごとに異なりながらも、機械的な翻訳方法がある程度確立していたことを示すだろう。第二巻の訳はロンドン本に対応がなく、同じ翻訳祖本にさかのぼるかどうかについて著者による議論はない。ただ冒頭で説明したようにロンドン本(及び甘肅本)は漢文原典の二巻分を二巻に分巻しているが、敦煌北区本に残された丁付からはそれが確認されないで、これもやはり独立した翻訳であつたのかもしれない。

第三節は一頁 (p. 86) で、『俱舍論』と漢訳『実義疏』およびウイグル語訳『実義疏』の対応関係の表を提示する。漢訳『実義疏』の最初の四巻の内のどれほどがウイグル語訳で残っているかが一目瞭然になるようになっていく。

第四節 (pp. 87-134) は、言語についての分析である。文字、音韻と形態、仏教術語、構文、漢字の訓読と漢文の訓

読がテーマとなっている。著者の積年の研究が集約されていて壯観である。文字の項では、音素  $\langle \text{h} \rangle$  /  $\langle \text{p} \rangle$  と文字素  $\langle \text{h} \rangle$  /  $\langle \text{p} \rangle$  の対応について著者の見解が述べられる。 $\langle \text{h} \rangle$  と  $\langle \text{p} \rangle$  の混用は特に後期のウイグル語文献に於いて顕著で、ウイグル語文献言語学の難問中の難問である。著者は先行研究は敢えて無視して批判せず、有声無声の対立を持たない漢語の影響、モンゴル語の書記法の影響、文字の形式上の混同を避ける配慮を混用の背景として考察する。このうち漢語の影響は排除されるが、他の二つについても決定的とは言えず、難問は今なお未解決であるらしい。なお文字  $\langle \text{h} \rangle$  と  $\langle \text{p} \rangle$  の語中での区別について、後期のウイグル文献で消失したように著者は書いている。確かに古いウイグル語文献には両者を区別するものがあるが（庄垣内『内陸アジア言語の研究』2, pp. 41-42 参照）、一方でウイグル文字の祖である草書体のソグド文字には既に  $\langle \text{h} \rangle$  と  $\langle \text{p} \rangle$  は区別がなくなっているものもあつたので、事態は複雑である。この問題は今後とも考究すべき問題であろう。

音韻と形態の項では、ウイグル文『実義疏』の音韻・形態は伝統的なウイグル語と変わらないことが指摘され、その上で幾つかの珍しい語形をあげて解説する。それらはいずれも後期ウイグル語の特徴であるという。ただし「脳」を意味する  $\text{m} \langle \text{h} \rangle \text{h} \langle \text{h} \rangle$  だけはその限りではないだろう。言語学的に極めて興味深いのは、ペルシア語の並列の接続詞  $\text{u} \langle \text{h} \rangle \text{and} \langle \text{h} \rangle$  からの借用語が、75A と 75B で四例在証されるという指摘と、ウイグル語の  $\text{od}$  「時間」にモンゴル語の複数接辞を付加した  $\text{odut}$  「しばしば」が同じく両写本で五例見られるという指摘である。言語接触において、文法的な形態素が借用されることはある程度密接な接触を示唆するので、他にも借用された類例がないかを探すとともに、他の説明ができないかも調べる必要があるだろう。たとえば注95で、同じように接続詞  $\text{p}$  が見られる例として言及する大谷資料 No. 7166 のような世俗文書では、庄垣内が  $\text{p}$  と読む文字は  $\text{p}$  であつて、動詞  $\text{pyr} = \text{ber}$  「与える」の略号であることが知られている（松井太『内陸アジア言語の研究』XIII, 1998, pp. 46-47 参照）。著者の翻訳からも明らかかなように A3588 は  $\text{and}$  の意味で解釈しにくい文脈である一方で、問題の文字の直後には同じ形の文字  $\text{p}$  で始まる語が続い

ている。書き損じられた p であるとも解釈できる。また庄垣内が『高昌館訳語』の来文にある例の解説として言及する I. Ligeti, *Acta Orientalia Hungarica* 22, 1969, p. 206 の u の項では、その語の現れる環境は、主語が同じ動詞の間ないし、同じ動詞に支配された並列の名詞の間であるとしている。残りの三例もこの基準にはあてはまらないように見える。

仏教術語では、漢語の透写語的な用語の説明に続いて、漢語から音借用された語彙の説明がなされる。定着した借用語以外は、基本的にウイグル字音で導入されているという。このウイグル字音資料こそは一九九六年以来著者が精力的に研究してきた所であり、他の研究者の追隨を許さない、まさに自家葉籠中の研究テーマである。ちなみに漢語の匣母(ぎ)は、唐代には無声化し、ウイグル字音では無声音で導入された。そのことは庄垣内『ロシア所蔵ウイグル語文献の研究』2003, p. 70 でも指摘されている通りであり、「含」と「合」は yam, yab ではなく gam, gab と転写される。著者が例外的であるとする「八」var の初頭音を、評者が hyper Sino-Uighur form と呼ぶことについては拙稿『アジア言語論叢』3, 1999, p. 7 参照。

サンスクリットからの借用形式についても、庄垣内は一九七八年に発表した画期的な論文で、ウイグル語仏典に見られるインド語から借用された仏教用語の多くは、トカラ語を経由して導入されたことを論じた。今や学界の定説として、ウイグル仏教の成立を論じる文脈でも引用される。トカラ語に導入され定着したサンスクリットの形式と一致するウイグル語の術語が、語尾によって分類され列挙されている。このことは梵語の sphatika に由来するトカラ語 B 形 spharir から借用された siparir のような形式にも言及する(とがむとよべ)。(M. Shogaito, "Uighur influence on Indian words in Mongolian Buddhist texts", in: S. Bretfeld and J. Wilkens (eds.), *Indien und Zentralasien. Sprach- und Kulturkontakt*, Wiesbaden, 2003, pp. 119-143 参照) ウイグル文『実義疏』にはトカラ語經由の要素以外に、新たにサンスクリットから借用された要素も認められる。それらには、サンスクリットの語幹末母音をも写すごく一時的な形式があるという。

こ)では、一〇四―五頁で指摘された、naga-arcune (≪ nāga-arjuna) のようなウイグル語仏典に特有のサンスクリット形式が、ウイグル語の訳文のなかで漢字で那伽遏主寧のように表記されている例が指摘されている。この漢字音写は、通常の漢訳仏典に見られる音訳語とは異なり、ウイグル字音を用いて音写されていて非常に興味深い。同様の例が『俱舍論』のウイグル語訳に見られることを指摘しておきたい。ここでは Kumaratata が具摩囉羅地と音写され、ウイグル語形 kumaratle (百濟『印度学仏教学研究』31/1, 1982, p. 113 では kumaratati ≪ kumaratati と読む) に一致する一方、玄奘の音写形拘摩羅邏多(『大唐西域記』)と一致しない。評者にはウイグル人がなぜあえてこのような音写語を使ったのかその理由が分からない。

構文の項では、他の多くのウイグル語仏典が基本的にウイグル語本来のシNTAXで翻訳されているのに対して、ウイグル文『実義疏』が、ウイグル語本来の文節構成法の許す範囲で、可能な限り漢文原典の語順を真似ようとしている点と、真似る手法が分析されている。その上で、文法的な機能を持つ漢字「応」、「能」、「可」、「令」、「雖」、「豈」、「為」、「欲」、「将」、「而」、「乃」、「即」、「方」、「則」のウイグル語訳について論じる。評者には、「令」による使役構文が、 $\text{pw nwr}$  を使った構文で表現されているという発見は特に興味深かった。これらは、漢文原典をウイグル語で読み下すときにはどうしても定訳が必要な要素である。なお注116 (p. 122; p. 457 も) では「況」の訳 taqi na ayimis kangak について論じているが、ソグド語を研究する評者には極めて興味深い。ソグド語でも反語の「況」は  $\text{'cwZY pw nwr}$   $\text{wn'kw'psy}$  「お前はそれを尋ねるのだろうか、(いや尋ねないだろう)」という構文で表現される。これを参考にすれば、当該のウイグル語は庄垣内のように「さらに何を云うべき」と訳すのではなく、「さらに何を尋ねるべきだろうか」と翻訳するべきではないだろうか。いまだに意味の知られていないソグド語の  $\text{pw nwr}$  はウイグル語の taqi と同義で「いまさら」を意味するのであろう。 $\text{nwr}$  は確かに「今」を意味する。

続く漢字の訓読と漢文の訓読の項では、ウイグル人が仏典をウイグル字音で音読する以外に、ウイグル語で訓読し

ていたことを証明する。むしろそれが可能にまるためには、個々の漢字が訓読できたことが背景として存在したはずで、ウイグル文中に書かれた漢字は訓読されていたことが、送りがなや頭韻詩の分析から確認できるとしている。ウイグル人による漢文訓読の存在も庄垣内の発見にかり、字音とともに漢字文化圏に普遍的な現象として文化史的にも注目されている。ちなみに著者はまた、ウイグル人たちがウイグル語の語順に合わせて漢字を並べた擬ウイグル漢文を書いていたという事実も発見している。

著者の重要な結論の一つは、極端な擬漢構文で翻訳されたウイグル文は、漢文原典を理解するための便宜であったということである。しばしば見られる漢字の引用は、翻訳が原典のどの部分に対応しているのかを示す符丁として働いたであろうとも指摘されている。文化史的には、注一三二(頁132)で言及された、ウイグル文と同様に左から右に行を配列する漢文文献の存在も注目される。百済も『俱舍論』のウイグル語訳の写本に類例を発見している(『龍谷大学論叢』425号1984, p. 77)。高田時雄はウイグル字音による「法華経難字音注」も同じ体裁で書かれている事を指摘している(『東方学』70, 1985, p. 147)。これらから遡ること六〇〇年以前、ソグド人女性、康波蜜提の漢文の墓誌でも行は左から右に進んでいる(黄文弼『高昌集』一九五一、図版六七参照)。敦煌出土の吐蕃支配時代の貝葉写本 P. C. 3923 については、漢文が左から右に横書きされている。漢字文化圏と他の文字圏との接触地域に発生した文化史的に興味深い事象である。

第二章 (pp. 135-63) は、『実義疏』以外のアビダルマ論書として、サンクトペテルブルグのロシア科学アカデミー東洋文献研究所が所蔵する『入阿毘達磨論』の注釈(文献番号 SIKr. I.24, 27, 28, 29, 30, 33) と、ベルリンのトルファン学研究所が保管する『阿毘達磨俱舍論頌』の注釈二点(U5650, U5674)の校訂と研究である。別に単行の論文として発表してあったものの再録である。巻末の語彙にはこれらの写本に含まれる語も収録されている。後者は文中にチベット文字とチベット語の数字を含んでいる点でユニークである。チベット文字の数字を含むウイグル語テキストは他

にもトルファンで出土しているが、それはタントラ文献であり、原典がチベット語であったという点から納得がいく。しかしここで扱う2点は明らかにチベット語からの訳ではない。チベット文字の方は二種類有り、一つは〇と読まれ、他方の読みは不明であるという。文脈から両者は各々「問」と「答」に当たるとする。〇が何を表しているかについて不明としながら、梵語の *codya* 「非難さるべき、疑わるべき」の省略形である可能性を指摘する。評者は、これらはチベット文字ではなく、北道のブラーフミー文字で各々、〇と𑖀と書いてあるのだと考える。前者は *codaka* 「質問者」、詰問者、後者は *vṛtikāra* 「注釈書の著者」の省略形であろう。( *vṛtikāra* が注釈者の意味で使われる点については、同僚の宮崎泉准教授の教えを受けた。記して謝意を示す。) 字形は L. Sander, *Paläographisches zu den Sanskritandschriften der Berliner Turfansammlung*, Wiesbaden, 1968, Tafel 36, 37 で確認できる。ではなぜ数字のほうでもチベット文字ではなく、ブラーフミー文字の数字を使わないのか評者には分からない。確かにブラーフミー文字の数字とは認められないように見える。

## 2-1-2 テキスト、翻訳、語彙

第三章 (pp. 165-465) は、75A の 4585 行のテキスト、翻訳、および注釈である。旧著同様にテキストと翻訳は見開きで対照できるようになっているが、注釈は旧著と異なり脚注にしてあり見やすくなった。しかも、はるかに詳細になっている。翻訳では、『俱舍論』に対応する部分は太字で印刷してあり分かりやすい。ただし旧著では対応するウイグル文の行数が書き入れてあって、原文と和訳との対照が容易であったが、本書ではそれらは全て省略してある。せめて五行おきにも行数を入れておけば、評者のようにウイグル語に不慣れな利用者には便利であった。正直なところ、書評に際して原文と翻訳を対照しようとして相当苦労した。

ウイグル語のテキストの読みの正確さの判断は評者の力を越えている。試みに百済が論文の中で比較的長く引用し

している箇所 (1916-1961行:『龍谷大学論叢』431、1988, pp. 73-74)と本書のテキストを比べてみた。音素転写にかかわる差違を除けば、文字の読みの違いはわずかに2箇所であった。一つは1949行目にある庄垣内が *azwip* 「抽出して」と読む語で、百済は *i:ip* 「整えて」と読む。ただしこの場合も文字の連続としては、両者とも *i-azwip* と読んでいることになる。ソグド文字の草書体以来、文字 *z* と *w* の形の区別がないことは上でも述べた。評者にはどちらの解釈が優れているのか判断は難しいが、庄垣内のほうがより文脈に合っているように見える。二つめは1955行目の *usudürin* (庄垣内) と *usudürü* (百済) である。この場合は、*usudürin* は誤植である。本書の語彙では正しく *isudürü* が登録されている。要するに、多くの文字が字形の上で区別できなくなっている極めて読みづらい草書体の写本ではあるが、庄垣内の読みには全幅の信頼をおくことができる。

テキストは所謂音素転写に文字転写の要素を加味したものになっている。文字転写と音素転写の両方を提出することが理想だが、そうするとテキストのボリュームは二倍になってしまう。文字 *r*, *y/g*, *s* に添えられた補助点は無視されるが、文字 *+* と *o* はテキストでは区別されている。むしろそれがそのまま音素に対応する訳ではない。音素表記のほうは語彙表を見れば判明するように配慮されている。たとえばテキストに類出する *ad* 「名前」は、写本では *ad* と表記されていることを示している。一方語彙表では、ウイグル語の音素形式である *ad* で登録されている。評者がとまどったのは、*s* と *z*, *s* と *z* の違いである。テキストでは音素表記されていて、写本の文字の違いは文字の直後のハイフンによって示される。従ってたとえばソグド語からの借用語の *azun* は、テキストで *azun* とあれば写本では *azun* と綴られ、*az-un* とあれば *z-un* と綴られていることを示す。同じくソグド語からの借用語である *uzik*, *uzik* *swn* と綴られ、*az-un* とあれば *z-un* と綴られていることを示す。同じくソグド語からの借用語である *uzik*, *uzik* 「文字」は、テキストでも語彙表でもこのように表記されているが、すべて *wzyk*, *wzyk* と綴られている。著者の表記は首尾一貫して問題はないが、どこかで説明があるほうが良いだろう。この関連では、音素 *z* と *ad* と文字表記の問題だけでなく、*/s/ vs. /z/*, */s/ vs. /z/* もまた議論されるべき問題ではないだろうか。たとえば後期のウイ

グル字音における /g/ と /z/ の区別の有無については、著者と評者の間で深刻な見解の相違がある（拙稿『アジア言語論叢』<sup>36</sup>、1999, pp. 6-7 参照）。なお旧著と異なり母音素 /e/ を認めているので、75B のテキストを利用する際には、本書の語彙によって表記を確認しなければならない。

評者には本書の翻訳を評価する能力もないが、庄垣内の翻訳の正確さは次の点からも確認される。上で述べたように、1039-4 行はパリの抄本に対応箇所があるが、庄垣内はそれに気づかなかつた。この部分の和訳を漢文原典と比べてみよう。原典は偈頌になっている…

修福及智所得果 皆為利他非自利 猶月光淨照十方 世尊悲願亦如是

「修による福、及び智において得たところの果は、悉く利他をなすもの故である。決して利己のためではない。猶、月天の清浄な光が十方を照らすものごとし。そのようにまた、世尊等の慈悲心、願いもそうである。」

原文の大方の漢字が翻訳には現れ、意味もほとんど対応している。このように和訳は原典の漢文を想定して作ったという事で、「現代日本語として多少ぎこちない (p. 105)」ことは著者自身が認めている。たとえば 3562-3 行を著者が「猶、四州が鉄圀山（と云う）境界もつて、四至もつて成じたごとし」と和訳する所を、P. ツイーメ・百濟は「ちようどまるで、四つの州を金剛鉄圀山が、界、四至となり（圀んでいる）ように」と分かりやすく訳している（『ウイグル語の観無量壽経』京都 1985, p. 153 参照）。

難解な仏教論典を和訳するにあたって庄垣内は旧著でも本書でも仏教学者の援助を仰いでいる。著者と訳文の校閲にあたる仏教学者との仲介をした旧著の評者福田が指摘するとおり（福田 1991, p. 103）、著者の和訳を理解するには読者の側の丁寧な読解が要求されるが、それはウイグル語原文の読みづらさであると同時に、内容そのものの難しさにも起因する。評者自身が理解にとまどった例をあげて、本書を読み進む上での注意を喚起しておこう。四五頁は、

75A における訂正の性質について論じている箇所である。1290-4<sup>37</sup>、原文の「善知識者誰、謂佛令生智、離放逸患

行) 違此即捨離」が、初めは *munung tägštünčä-si ärsär incip tñip öngi üdrilgülik ol ärtür tep* 「これの違は即ち捨離である」と訳され、それが *munung tägštünčä-si ärsär incip tñip öngi üdrilgülik ayry ögli ärtür tep* 「これの相違は即ち捨離すべき邪智である」と訂正されているとし、原文には「邪智」はないから、訂正前の方が原文に近いとしている。この部分は善知識について説明しているところであるが、「訂正」前の訳文は確かに個々の漢字を正しく翻訳している。一方訂正文は原文の意図をより具体的に補足したもので、善知識と悪知識について説明して、「此と違う(すなわち智を生じさせて、悪業から離れさせてくれる友人≡善知識と違う)者は、捨て去るべき悪友である」という意味であると理解される。訳文から実際に文章が意図していることを理解するのは、評者のような読者には時間がかかった。たとえば *ayry ögli* 「悪を思ふ者≡悪知識 (*ögli* は動詞。「思う」の行為者名詞)」を「邪智」と置き換えることは直訳として正しいのかもしれないが、具体的な内容を理解するのは困難であった。ちなみに初めの文の「彼」の右横に「○」が添えられ、その左横に *ayry ögli* が書かれている。著者のいう「訂正」のうち、評者が「artü」に従い、内容の補足に当たるとするのが上の例である。

第四章 (p. 467-745) は語彙である。語彙には、75AとBだけでなくストックホルムの『俱舍論』や、本書で研究が提出されたベルリンとペテルブルグの関連資料の語彙も含まれている。従って登録された見出し語も相当増えている。全体が二八〇頁ほどの語彙の最初の四〇頁 (BとB<sup>2</sup>で始まる語彙) で見てみると、実に二八語が増えていた。動詞 *äri* や *te* の活用形のような頻出するわずかの語彙を例外として、75Aと75Bに現れる全語彙と出現場所を指定してある。また訳語として対応する原文の漢字を可能な限り添えてあることも特徴である。この配慮があるおかげで、旧著の語彙はウイグル語研究の必須の工具書となっていたと、多くの研究者から聞いたことがある。その旧著の語彙は二一四頁であったので、本書のその価値はざっと一・五倍にもなった。もちろんここでも読者は丁寧な注釈を読んで利用する必要がある。たとえば上で議論した *ayry ögli* は、語彙でも「邪智」と訳されているが、これはむしろ対応する

原文の語ではない。

ソグド語を研究する評者には kabit の例が興味深い。語彙では *kedin kabit-lig vardu* に「店事」の訳語が与えられている。Kabit はソグド語の *qpyδ* (マニ文字表記) からの借用語で、そのソグド語もギリシア語 *Kapeleion* 「小売商店」から借用された。確かに意味は日本語の「店」に対応するが、漢語の「店」は「キャラバンサライ」のような意味を持つ語であって、*tem* としてソグド語やウイグル語、モンゴル語にも借用されている文化語彙である。「店」が *kabit* と訳されているなら注目される。そこで該当する部分の注釈を読むと、前後する語の *tariy-lay-lyi vardu* と *kisi-oyu-ta ulati vardu* は各々『俱舍論』にある「田事」と「妻子等事」に対応しているが、*kedin kabit-lig vardu* 「市場・店舗のことから」商業活動」には対応する漢語表現はないことが分かる。(ちなみに『華夷訳語』の高昌館訳語では *kabit* に対応する漢語は「舗面」である、cf. L. Ligeti, *Acta Orientalia Hungarica* 19, 1966, pp. 171, 301。)類例の例は *vast̄̄sasagotre braman* ʹ、語彙では「筏蹉婆羅門」が訳語として与えられる。この場合は本書四五―六頁に詳しい説明がある。著者の所謂「訂正」前の原文には *vasti-nyus-lyi-nung* とあり、その四形態素の右横に「○」を添えてある。その左横に *vast̄̄sasagotre braman ning* が添えられている。前者は『順正理論』の原文「筏蹉類」の直訳であるが、後者は「最良の一族のバラモン」を意味し、筏蹉類すなわち *Vatsa-gotra* (庄垣内は *Vatsya* とする) が、最高のバラモンの一族であることを示している。従ってここでも原文に筏蹉婆羅門があったわけではないことが分かる。

本書のような特殊文字を多用する大部な研究書では誤植や細かなミスは避け得ないし、確かに幾つかは見つかるが、深刻なものとしては六二―四頁の *qin qizyt* 「治罰」が気になった。この *qin* 「罰」は「蔵」を意味する *qin* と同音異義語なので、別に項目を立てるべきであった。また五一ページ注六四で引用された *Geng Shimin* (2002) からの引用に見える英語の誤りは、本書で発生した誤植である。これは誤植ではないが、本文中に *Aydar* (2005) あるいは

Mirkamal (2005) と言及されている文献が、和・漢文参照文献の冒頭の阿衣達爾・米爾卡馬力 (2005) であることを理解するのに苦労した。

### 3 おわりに

以上に述べて来たところから、本書のウイグル語文献研究への抜群の貢献や仏教学への多大な寄与、さらにウイグル仏教史および中央アジア文化史解明のためにどれほど多く資するものがあるかは明らかになったと考える。B5版で七五〇頁にもなる本書の威容を見るに付けても、本書は橘瑞超と羽田亨によって創始された日本におけるウイグル語文献研究の金字塔であり、世界に誇るべき到達点であると思う。幸い日本には若く優秀な研究者も現れており、世俗文献でも仏教文献でも日本における研究の将来は明るい。奇しくも同じ年に笠井幸代の大部な著書 *Die wigurischen buddhistischen Kolophone*, Berliner Turfantexte XXVI, Turnhout, 2008 が公刊された。評者のように日本で細々とソグド語文献を研究している学徒には、羨望の念と同時に威圧感すら感じるほどである。庄垣内のような碩学から、中堅、そして若手と真に豊富な日本人研究者たちの今後の成果も大いに期待できる。

『ウイグル文アビダルマ論書の文献学的研究』京都 松香堂 二〇〇八年、

pp. viii + 750 + 4 図版 (定価 13,020 円)